〔問題提起〕

国語教育の問題点

川端俊英

昭和四十五年八月の光葉会国語教育学会で行なわれたシンポジウム「高校教育の現場で直面する問題――国語科を中心として――」に、わたしは提案者の一人として参加した。当日の提案内容に多少加筆したものをここに提示し、みなさんのご批判を仰ぎたいと思う。

ここ数年来、高校紛争をはじめとする高校教育界の諸現象の中で、「教師と生徒との断絶」などということが口にされる。このような「断絶」が現にあるとすれば、それはまさに教育の危機的状況といえよう。これは今日までの教育の欠陥の一つのあらわれでもあろうし、今後の教育上の重大な課題でもある。もし、この問題が放置された状態の上に「国語教育」が存在したとしても、それは国語教育といえるものではないと思う。

最近の生徒には、たしかにさまざまな問題がある。教育現場における日常の観察の中から、特徴的な現象をいくつかあげるとすれば、まず学習意欲の減退、怠惰の傾向である。(「なにもしたくない」「どうでもよい」「おもしろくない」などという。) 次に享楽的、刹那的傾向である。(「好きなことをやりたい」「先のことなどわからない」などという。) そして感情的、衝動的行動である。(「理由などない」「知らない間にそうしていた」など) それから自己中心的、利己的傾向である。(「自分のことなどわかってもらえない」「他人のことなどに首をつっこみたくない」など) 以上にみられるような傾向が、セックス、スピード、スリル、暴力、家出、その他大小の非行へと生徒たちを追い込んでいく。これは一地方に限られたことではなく、日本の青年の問題である。個々の教師や学校の限界をはるかに越えた巨大な社会的現象といえるだろう。

では、こうした現象はいったい何に起因しているのか。そこには、生徒たちを取り巻く状況がある。高校教育は年々多様化の方向をたどり、受験体制の中では個性は生かされず、激しいせり合いは優越感と劣等感とのいりまじった息苦しさを生み、自主活動の場はしだいにせばめられ、ひとりひとりはバラバラに孤立させられ、腹を割って話し合える友人ももてない。欲求不満はますますつのり、爆発するか自閉症に陥る。生活の面でも、経済の繁栄とはうらはらに物価高、生活苦は相変わらず、人権無視、人命軽視の社会状況は戦争や公害をはじめとしてかれらを暗く取り巻いている。さらに、見逃せないのは低俗退廃文化である。はんらんする漫画、雑誌、映画、テレビ……の影響下にあって、青年の健康な考えは毒され、社会的現実からは知らず〳〵に目をそらすようになり、さらには矛盾を矛盾とも思わないようになっていく。すなわち、文化公害であ

る。

では、現在の教育ははたしてこうした生徒を取り巻く状況に対応しきれているかという問題である。生徒を取り巻く状況は日に日に生徒をだめにし、救いがたいものとなってきている。いいかえれば、生徒はいつだめにされるかわからない危険な状況にさらされているわけである。もはや、教育は教科書の中、教室の中にだけ閉じこもってはおれない段階にきている。状況の正しい把握の上に立ち、状況に対応した教育が必要とされるわけである。もちろんそれは、いかに逃げるかという保身術を教えるものではない。状況にうちかつ教育である。

状況と生徒との関係は加害者と被害者の関係である。被害者である生徒が、被害者であることを意識し、加害者との関係を明確にし、それと対決できる姿勢をつくることこそ生徒のための教育である。生徒自体は決して救いがたいものではない。底に変革と成長の可能性を潜めている。生徒は口では「どうでもよい」などといいながら、つきつめていくとやはり「何とかしたい」と思っている。「何とかしよう」としても「どうしたらよいかわからない」のである。「どうしたらよいかわからない」から「好きなことをやろう」とするのである。「好きなことをやって」いても、それでいいなどとは決して思っていないのである。この「何とかしたい」という生徒の要求を的確にくみ上げ、「どうしたらいいか」という青年の生き方を考えさせるような教育は、生徒の現実に対応したものでなければ不可能である。

これは高校教育の課題であり、また国語教育のになうところでもある。もちろんこれは、生活指導の分野にだけまかされるものでもないし、また国語教育という一教科の中にとどまるものでもない。生活指導と国語教育の結合である。国語教育が真に成果をあげれば、生活指導もうまくいくし、逆に生活指導がうまくいけば、国語教育も成果をあげることができるという関係にある。結局、学校教育全体の中で国語教育がいかに位置づけられるかということである。

そういう観点から、今国語教育をみた場合、再検討、改善の余地があるのではなかろうか。国語教育の教育内容、方法の問題である。わたしは、生活と結合した国語教育、科学的認識を育てる国語教育の重要性を痛感している。国語教育が生徒の生活現実に即応したものであるならば、今かれらに与えるものとして、万葉と古今のどちらに時間をかけたほうがよいか、啄木や晶子のどんな面が今かれらにとって必要なのか、また教科書の小説教材よりももっとよいもの、かれらの渇きをうるおせるものがあるのではないかといったことが問題になるはずである。そういう形で教師の主体性も問われることになるだろう。

昨年、わたしの受け持ちのクラスのT君が新聞配達の途上、タクシーにはねられて即死するという事件が突発した。T君の家庭は、おばあさんと二人の弟だけの生活保護家庭であった。T君は働きながら夜学に通い、一家を支えていたのである。わたしは国語の授業をこの問題に切りかえた。生徒にT君の死についての感想、意見を求めた。生徒たちは「気の毒だ。」「かわいそうだ。」という同情から始まって、やがて「T君には、おとうさんもおかあさんもいなかったとは今まで知らなかった。」「T君が一家の大黒柱になっていたとは知らなかった。」と驚き、話し合いが深まる中で「もっとT君を知

るべきではなかったか。」「なぜもっとT君と本当の話をしなかったか。」とくやしがった。そして「T君の悲劇はT君だけのことではない。」「T君の問題は、そのままわれわれの問題でもあるのだ。」ということに気づいた。そこから発展して、「T君の死をただいたむだけでなく、T君の悲劇をくり返さないことだ。」「そのためにもみなが、もっとおたがいに知り合うべきだ。」という方向にたどりついた。

先日、現代国語で村野四郎の詩「惨憺（さんたん）たるあんこう」（筑摩、二）を扱った。作者は「さかな屋の店先の梁などから、かぎにひっかけてぶらさげられ、客が来るたびに、一へら一へらずつ切り取られ、売られる」あんこうについて、「この惨劇は、現代のわれわれの状況の何かに似ている」と述べている。そして詩の最後の「大きく曲がった鉄のかぎ」とは「また新しくひっかかってくるものを待っているもの」だと述べている。生徒たちは、この「鉄のかぎ」こそT君を死に追いやったやつであり、現にわれわれをおびやかしているやつだということを生活現実との結合の中からつかみとっていった。そうした現実認識が、この作品をより深く理解することにもつながっていった。

作品に接した生徒の生活から出てくる主体的な問題発見が、作品により深くきり込むことをとおして、客観化され、その問題のもつ法則性なり関連性が社会的歴史的現実の中であきらかにされなければならない。それが生徒の生活の場に応用されることで返されていく筋道をつけてやることが、国語教育における科学的認識というものだと思う。

ところが、残念ながら現行教科書には、生徒の問題意識を喚起させ、科学的認識を育てる教材を期待しにくい現状である。「教科書にあるから教える」という生徒の現実とは無関係にすすめられる教育は生徒に対して無責任である。生徒の人間的成長に責任をもつ教育でなければならないと思う。

学力とは、受験体制にひきずられた〝つめこみ教育〟による知識の集積ではなかろう。社会的現実や人生の諸問題について深く見つめ、矛盾やゆがみを鋭くとらえる力であり、自主的科学的に判断し行動できる発展性と創造性とを備えたものでなければならない。そこから生きる喜びも、未来への展望も生まれてくるものと思われる。

以上

一九七〇、九、三〇

（京都府立鴨沂高校教諭）